nding much time on the negotiations hereafter.
Such being the circumstances, the Japanese Government
nding their best efforts to the successful conclusion
negotiations, but there is naturally a limit to our
liatory attitude. Should an occasion arise such as
menace the very existence of the Empire or compro-
the prestige of Japan as a great Power, it goes
t saying that Japan must face it with a firm and
ate attitude. For my part, I am taking charge of
egotiations with a firm resolve regarding this point.
Japan is now confronted with an unprecedentedly
cult situation and it is necessary that the entire
n should unite and join forces to overcome it.
nal defence and diplomacy are inseparable while
nal politics and external policy are counterpart
ch other. At no time is the need for the mobiliza-
of the nation's total strength, with the Government
he people uniting, felt more acutely than at the
nt juncture.
In concluding the frank statement of my views and
ions, I earnestly hope that hundred millions of my
w countrymen will extend their full support and co-
ation.

15.2.0.

昭和十六年十一月二十一日

東條首相、東郷外相議會演說の反響

外務省調査部第五課

秘

△独・伊・米・英・支・[illegible]・

伊太利

△ジョルナーレ・デイタリア（一一・一八社説「日本の立場」）

米國

△華府ポスト（一一・一八）

△紐育ヘラルド・トリビューン（〃）

英國

△ロンドン・タイムス（一一・一八）

△マンチエスター・ガーヂアン（〃）

△デーリイ・メール（〃）

△デーリイ・スケツチ（〃）

演説は十七日ラヂオ放送として[illegible]を以てドイツ國民に對する宣傳用としては不適當と認め、演説內容は全然掲載されす、唯議會の開會か簡單に報道された丈だと傳へられてゐるか、十八日正午過ぎ、外務當局は、記者團との定例會見において、日本の政策か三國同盟を基調とする話を強調して次の如く述へたといはれる（註、その後首相の演説要旨掲載さる）

「この演説にも明らかにされてゐる如く、日本外交の基調か三國同盟にあることは明かである。アングロサクソンの日本包圍政策、タイ國に對する陰謀、挑發行爲なとは、英國か米國を使嗾し共同して行つてゐるものであるか、これに對する日本の方策は、東條首相の三ケ條の外交基本政策に盡きてゐる。東鄕外相はこの條件に基き日米交渉を行つてゐるものであるか、これか今後繼續され

[illegible]積極的なものでなく、また日米關係についても實質的な發言かなされなかつた爲に好評を博してはゐない模様の如く傳へ、また消息通の意見として、支那事變の解決は英米の妨害を排除しなければ不可能であるといふことか明言されたことは從來の諸演說に比して一歩前進であること、日本か三ケ條の根本原則を固守する限り日米交涉の成立は不可能であると見るより外にないことか指摘されてゐる旨報じられてゐる。

△伊太利ーステフアーニは、十七日、東鄕外相演說の末段における「もしそれ米國政府か、、、、、」以下「今後の交涉に長時間を要すの要なきことは米國側にも明かであると信ずる」までを削除し、同日の各紙は右ステフアーニ通信を揭

2

大きく報道し、また十六日、ジョルナーレ・ディタリア紙は「日本の三つの要求、東條首相は日米交渉成功の可能性少しとす」、ポポロ・ディタリア紙は「東條首相日本の断乎たる態度を明かにす」、ラボロ・ファシスタ紙は「國策完遂に關し日本政府の決意不動」、トリビューン紙は、「日本決意の秋、東條首相は英米との交渉に信を置かす」等の大見出して報道した。

尚は外交消息通間では、日本の外相演説でかくも明白に對米決意が語られたことは曾つてなかつたとしてゐる旨傳へられてゐる。

別項所載ガイダの論説も、ステファーニ通信の削除した部分を引用して、その點を指摘してゐる。

ニューヨーク・タイムス、ヘラルド・トリビューン兩紙か演説全文を掲載したほか、夕刊各紙も演説要旨を載せ、何れも東條首相の三條件及び東鄕外相か「日本の協調的態度にも限度あり」と述べた點に重點を置いて報道した。右の演説に對し政府筋は批評を避けてゐるか、一般の印象は餘りよくなく、來栖大使の活動開始の背景としては餘りにも強硬、非妥協的と見られ、來栖大使か交渉妥結に關し特別の權限を有し、右の演説より離れて別個の提案を爲さない限り、交渉妥結は望みかないと見られてゐる。十八日のニューヨーク・タイムス紙か社説欄て、東條首相の三條件を論評し、その何れも米國の約束と根本的に背馳するものてあり、これか承認を米國に求める如きは全くナンセンスてあると論してゐる如き、その代表的なものてある。

うを目標に掲げ、「日米交渉に和平を期す」、「三国同盟を堅持」等の見出しで刺戟的に報道し、十八日には各紙とも重要欄において報道、それぞれ論説において批評を行つたが、各紙とも好感を示さず、東條首相の三原則の宣明、東郷外相の三国同盟認識によつて交渉妥結は望み薄となつた、何れにせよ日本が実質的譲歩を為さざる限り経済断交の撤回を求むることは不可能であり、太平洋の戦争はいよいよ切迫しつつあり、と論じてゐる。

△支那—十七、八日上海各紙は、両相演説を第一面に大きく掲載したが、各紙の論調は左の通りである。

一、英字紙は何れも、両相の議会演説に依つて、日本の既定政策に変化の無いことが明白となり、日米交渉妥結の望みは全く絶え、今や戦争か否かは日本の出方如何に懸るに至つたと為るに一致

代表する日本政府の最後の回答てあるとするなら、日米交渉の成功は全く望みかない。尤も右交渉の決裂は直に戦争を意味するものではないか、日本か今後とも侵略政策を継続するなら、英、米、蘭印との衝突は避け難いと論し、上海タイムス紙は、「両相の演説によつて日本は枢軸関係及支那問題に付き其の既定政策に変化無きことを明白にしたか、米国の政策は、この点に関し根本的に相違して居り、米国か譲歩しない限り、日米関係の恒久的解決は不可能なるのみならす戦争を誘発するやうな事件か頻発するてあらう。従て来栖大使の成功の見込みは少いけれとも、若し成功したなら全世界の感謝を受くることにならう。」と述へてゐる。

二、漢字紙の中、抗日紙は何れも、首相及外相の演説は暗に「絶望

三、露字紙ー[illegible]紙ノーワヤジーズニは「東郷外相の演説に於て来る大臣の議会並に日米交渉に関し言明がなされなかつたことは物足りないが、日蘇中立条約を支持する旨の言明がなされたことは興味深いものがあり、且つ首相演説は、日本の平和的傾向を示して居り、日本は戦争よりも寧ろ妥協を選んでゐるのであるから、日米交渉は重大なる意義を有してゐる」と述へた。

△蘭印ー夕刊各紙は十七日両相演説を大々的に取扱ひ、特にバタヴィアシェ・ニュースブラッド紙は、「日本南洋に多大の関心を寄す。ABCD陣に最大[illegible]起」の見出しでセンセーショナルに取扱つた。十八日の蘭字紙は、演説の内容に反駁を加へ、太平洋

7

米と結け、他のものも皆に戦争の危機増大を強調するに至つたがクバンジャン紙のみは、ＡＢＣＤ陣の強化を誇り、日本の敗北の必至を強調し、併せて暗に渝人と土人との団結の完全でないことをも示唆した。

8

S 1.5.2.0 - 3　1366　571

「日本の議會においてこのやうな演説が行はれたことは曾てなく、また日本の外交政策に關する外務大臣の言葉がかくも論旨明快に且つ斷乎たる警告の形をとつたことは曾てなかつたことである。日本政府首腦は、これまで日本に對する英米の威嚇、日本と英米との戰爭の可能性に對して自重の態度を持して來た。然るに東郷外相の演説は破格の重要な演説となつた。東郷外相の主張は、英米の侵略政策に對する日本の計畫と方法を闡明したものであり、特に東亞に於ける日本の政策の力強い展開を斷乎高唱してゐる。

米論

△華府ポスト紙（一一．一八、兩相演説批評）

「日本の首相、外相兩者の演説で闡明されたところより判斷すれば、來栖大使の使命は極東の事態を日本が欲する通りの風に米國

9

たる讓歩に對し代償を提供するの用意あることは寸毫も仄めかしては居ない。否、反對に日本の首腦部は米國に對し最後通牒に近いものを突き付けんとすらしつゝある。若し來栖大使か此の日本の苛酷な要求以外に何等穩便な提案を携行してゐないとすれば、同大使は時間を空費するのみであらう。米國の協調態度にも限度かあることを忘れてはならぬ。日本か決裂を欲するならは米國はこれを與へる覺悟かある。」

△紐育ヘラルド・トリビユーン（一一・一八）

「東條首相、東郷外相の演説に照し、來栖大使の使命か如何なるものであるかは想像か出來よう。日本の所謂平和的提案に對して米國の與へ得る回答は唯た一つ、即ち平和ものによりけりで、ものによつては戰爭以上に米國の趣味にあはぬものかある。日本の新秩序觀と米國の世界觀とは到底一致し得ぬものたと答へるたけた。」

10

B 1.5.2.0-3　1368　573

ムッソリン、[illegible]」

「來栖大使はワシントンで、若し日本が米國側の讓歩を望むならばその償ひとして日本も少相當の讓歩をしなければならぬことを悟るであらう。その讓歩は言葉だけのものでなく行動に依るものでなければならず、更に過去十年間日本が自己の損害に於いて貫施して來た政策に根本的變化を齎すものでなければならない。若し來栖大使が何等か日米關係の緊迫を解くべき妙案を携行してゐるとするならば、問題はその妙案が如何なるものであるかに懸つてゐる。東條首相の所謂三項目は、來栖大使の使命に何等の光明をも投ずるものではない。日本政府が來栖大使を日米交渉打開のために派遣すると發表したとき、米國側では先づ何等か決定的な示唆が國務省に提示されるだらうと考へてゐた。しかしこの豫想は日本の各新聞並に一部閣僚の好戰的言辭によつて打破された。

11日

政策たとなした所のものを是正して、日本の要求に歩調を合せるへきてあると主張したのである。

東條首相も亦同様の方向をとり、彼自身今次會談の目的たといつてゐる「日木關係の根本的再調整」については先つ支那並にその他の極東にある日本の權益に對する日本の政策なり態度なりの再調整か必要たといふことを全然理解してゐない。一方東郷外相の演説も日木間の緊張を緩める上には何等の希望をも增すものではない。同外相はその議會演説に於て相當部分を日本の見解か獨伊と同様たといふことに割き、三國同盟は東亞並に歐洲に於ける新秩序建設に甚大なる貢獻をなすものであると賞讃した。元來三國同盟は米國に向つてなされたものであり、來栖大使はこの同盟交渉に參加し、之に署名してゐる點は注目さるへく、東郷外相の演

△マンチエスター・ガーヂアン紙一一・一八）

「東條首相及ひ東郷外相の演説は、周知の事實たる日本か總崩壊に入る瀬戸際に立つてゐることを公式に確認したものである。東條首相か日本外交の目的として擧けた二項目は、第一に米國は支那を放棄すへし、第二に米國は日本か支那を撃破するはかりてなく、北に出てソ聯を襲ふか或ひは南進して新たな領土に侵入するため日本の經濟力を維持せよと要求してゐることを意味するものた。若し右か總て明かとなつたならは、日米會談は米國大使の來着によつても依然として失敗てあるたらう。東郷外相はより自由な立場て日本の侵略行為を平和と正義に對する情勢の所為にしてゐる外、東條首相か述へたこと以外に新しい事は何も言つてゐない。東郷外相は日本包囲陣を形成したとて英米を非難してゐるか、

13

な言葉は、何か千島への善隣といふ言葉で意味する所のものを示唆してゐるか、これ程遺憾に充ちたものは又とあるまい。此等の言葉に依つて明かなやうに、現日本政府から期待し得るものは殆んどないと言へやう。

東郷外相は、日本は政策の修正を米國に約束し得るとは明らさまに言つてをらす、會談を無期限に続けて行くことは出来ないと附言してゐる。日本は反省する暇を持つてゐる。日本がしかけぬ限り戦争の勃発する惧れは全然ない。併し太平洋諸國は日本に殺込みを襲はれた時何の準備もしてなかつたと言ふ辯解の餘地はない。一九四〇年に日本は出し抜けにロシアに襲ひ掛つたし、これが今の流行なのだ。」

△デイリー・メール紙（一一・一八）

14

S 1.5.2.0 - 3　1372　577

つてゐないとすれは、米国大衆は[illegible]を出つたことにならう。東條首相は、日本の政府は結束から央不努力を撤退するにありと云つてゐるし、東郷外相も、日本の隠忍にも限度ありと云つてゐるか、こんな言葉か使節を派遣して米國と折衝させてゐる政府から出るといふことは不思議である。太平洋の平和は、ソ聯の地位かずつと悪くならぬ限り、日本か聯合國に對する挑戦的態度をすてることによつて保障されるであらう。」

△デイリー・スケッチ紙（一一・一八）

「ワシントンに於ける日米交渉の結果を待つてゐる間に誤り優望な見解を述へることは危険である。日本か穏健な途を歩むことを納得させるやうな一聯の事實か最後に日本を理性に訴へさせるかも知れないと云ふことは非常に困難なことたか全然不可能なことて

B 1.5.2.0-3 1373 578

△ジヤワ・ボーデ（一一・一八）

「首相の演説は、日本が満洲國を支持する一方、大東亜共栄圏の確立を計り、英米との戦争は寧ろ避けたいが、右の理念からは一歩も退かないものてあるを明かにした。けれども、米國の要求よりの後退は到底考へられない。両者間の主張には斯くの如き大きな懸隔があり、米國大使の努力も好結果を齎すとは全く期待し得ない。かくて戦争か平和かの決定は日本の手に移つた。今や英蘭の決意は固く、蘭印、ニュージーランドも亦之を支持して居り、和蘭は極東に於て英國と何等相互援助條約を有してゐないが、戦端一度相互の領域に及ぶ場合には何れも之を黙視し得ないことは勿論てある。

△バタヴィア・ニュースブラット紙（一一・一八）

16

B 1.5.2.0 - 3 1374 579

其の欠点を認め、今日より戦線は益々強化されたから、日本は之に對し猪突猛進しないであらうとかへるのは當らない。吾人は總ゆる事態に備へなければならぬ。

△スラバヤ・ハンデルス紙（一一・八）

「東條首相の演説よりして、我々の築つた[illegible]防禦か如何に有效だつたかを證ふことか出來やう。日本にして絶望切拔けの爲の戰爭行爲に出てんか、夫は自殺行爲を意味する。」

17

S 1.5.2.0 - 3